

Title	「プロデューサーシップのすすめ」-プロデューサーが紡ぐネットワークの重要性と課題-
Author(s)	
Citation	年次学術大会講演要旨集, 36: 1-3
Issue Date	2021-10-30
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/17760
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	

S P O 1

研究イノベーション学会 第36回年次学術大会企画シンポジウム

「プロデューサーシップのすすめ」 －プロデューサーが紡ぐネットワークの重要性と課題－

■開催日時:2021年10月25日(月)18:30～20:30

■主催:研究・イノベーション学会プロデュース研究分科会

＜企画セッション主旨＞

IOT、人工知能の研究・技術開発の応用が急速に進む中、世界の経済・産業・生活構造は想定を超えるスピードで変革しており、研究開発～事業化・生産～市場化、働き方・日常生活スタイルまでの時間とプロセスが大きく変化しています。こうした状況下、「望む社会を目指して具体的なミッションをもち、そのミッションを実現するため、必要な人材と連携・融合しつつ、現状の課題解決を実現していく手法を備えたプロデューサー人材」の必要性・重要性が増しています。

このセッションでは、激変の時代に益々重要性を増している「プロデューサーシップとは何か、その論理的解明・分析」を行うとともに、プロデューサーとして産官学民の現場で活躍している人材をお招きし、「プロデューサーシップの重要・必要性」「イノベーション創出に向けたプロデュースのあり方・方法」等について取り組みの先端情報をお伝えいただきます。また、「ミッションを達成するために、どのような課題がありどのように対処し乗り越えたか、自身の今後の成し遂げたいこと」、等、問題提起とワークショップを行います。このセッションを通じて、皆様に「イノベーションの重要性」と、「実現する為に様々な必要人材と組み、知恵と経験を活かしてミッションを実現していくプロデューサー」の必要性と重要性を知っていただき、また、日本にそのような文化・風土を育てる一助としたいと思います。

1. 発表者

原山優子氏 東北大学名誉教授(研究・イノベーション学会会長)

伊藤正実氏 群馬大学研究・産学連携推進機構教授

受田浩之氏 高知大学 理事

丸 幸弘氏 株式会社 リバネス代表取締役 グループ CEO

堂野智史氏 公益財団法人大阪産業局クリエイティブ産業推進部部長 MEBIC 所長

桜庭大輔氏 プロデュース研究分科会共同主査、在ニューヨーク日本国総領事館 領事

モデレータ 久野美和子氏 プロデュース研究分科会共同主査、電気通信大学客員教授

本田秀一氏 NPO 法人 ZESDA 事務局次長/プロデュース研究分科会共同主査代理

2. 内容

第一部では、「プロデューサーシップを深掘りする糸口の提示」、「プロデューサーとして産官学民の現場で取組んでいる優れた人材からの取組みの現状・到達点、課題と解決に向けての苦労」、「これらの実践をもとに、総合的な観点からプロデューサーシップの重要性とプロデュース手法の解明・分析」等について、プレゼンをいただきます。

○原山優子氏 東北大学名誉教授(当学会会長)

「プロデューサーシップのすすめ」を語るにあたり、その準備として参加者の皆様に「プロデューサーシップ」を深掘りする糸口を提示することを試みます。イノベーションのドライバーとしての起業家、ベンチャーキャピタル、インキュベーターなどに関してはすでに数多くの事例が分析され、理解が進んできましたが、それらが構成するイノベーション・エコシステムの一要素として「プロデューサーシップ」を位置付けるものです。

○伊藤正実氏 群馬大学研究・産学連携推進機構教授(元・産学連携学会会長)

群馬大学、茨城大学、宇都宮大学が実施している多能工型研究支援人材育成コンソーシアムでは主に セクター間連携に従事する URA を育成する教育プログラムを受益者負担で自立化して実施しており、令和 2 年度は全国から 20 大学の URA 等(約 150 人程度)が参加してこのプログラムを受講しました。この事業の受講者の評価でわかったことは、セクター間の連携における URA や産学連携コーディネータの活動の能動性が高ければ高いほど、所属大学での実績が質量とも向上し、さらにはそのための基本的能力として、それぞれのセクターの活動内容(大学で言えば研究コンテンツ等)の理解力が高いことが重要であります。今まで、こうした事は、観念論的には言われてきたことかもしれないですが、こうした知見をエビデンスに基づいて定量的に得ようとした試みは今までなく、その観点から大きな意義が本人材育成事業にあると考えます。

○受田浩之氏 高知大学 理事

内発的進化による持続可能な地域づくりに向けて、この14年にわたり高知県で進めている産業振興の取組みを紹介致します。まずは平成20年度から高知大学を中心に実施している土佐FBCという食品産業の中核人材育成事業であります。一次産業を基幹産業とする高知県において、素材の付加価値創出が最大の課題であったことから、その担い手の育成を産学官が連携して進めています。二つ目は施設園芸農業のDX化を目指した地方大学・地域産業創生交付金事業「IoP(Internet of Plants)」が導く Next 次世代型施設園芸農業への進化であります。土佐FBCの連携を基盤にしながら、一次産業をデータ駆動型産業へ導くことを目指して進めている本プロジェクトの現状を報告致します。

○丸 幸弘氏 株式会社 リバネス代表取締役 グループ CEO

2002 年の大学院在学中にリバネスを創業して以来、「科学技術の発展と地球貢献を実現する」という理念のもと、科学・技術の面白さを子供たちに伝える出前実験教室から、株式会社ユグレナをはじめとする多様な研究開発型ベンチャー企業の立上げ・事業のプロデュースに取り組んでおります。このプロセスで培ったプロデュース能力を次世代の若手人材に伝えていくとともに、1 人や1社単独では成し遂げられない地球規模の課題を解決するために「個のネットワーク組織」を構築し、所属や世代、国を超えて個人のパッションやビジョンに共感する仲間を増やしながら新たな事業を生み出し続けています。本発表では、個のネットワーク時代における地球貢献型ビジネスやベンチャー企業のプロデュース方法とその事例についてお話し致します。

○堂野智史氏 公益財団法人大阪産業局クリエイティブ産業推進部部長 MEBIC 所長

報告者は、大阪府市が運営する(公財)大阪産業局 MEBIC において、大阪で活動するクリエイターの自立・成長に向け、クリエイター同士、クリエイターと企業とのコミュニケーションを加速化し、コラボレーションやイノベーションを起こす環境づくりに取り組んでおります。これまで 18 年間に報告を受けたコラボレーション件数は 4000 件を超え、中にはイノベーションとも言える既成概念を打破する斬新な取り組みも散見できております。こうしたコラボレーションを誘発するためには、単なるニーズ・シーズのマッチングという視点ではなく、人と人との関係性を重視したイノベティブな関係性構築に向けた環境づくりが有効であると考えます。本報告では、MEBIC の活動事例をもとに、イノベティブな関係性が生み出される場の創り方について、コミュニティプロデューサーの立場から日頃注視しているポイントについて報告したいと思います。

○桜庭大輔氏 プロデュース研究分科会共同主査、在ニューヨーク日本国総領事館 領事

日本でイノベーションが進まない理由。それは、イノベーターへの過剰な依存を前提としたイノベーション・エコシステム観にあると考えます。果実が実らないのは、その木立一本に原因があるのか。多くの苗木を植えさえすればイノベーションは興るのか。むしろ、今の日本においては、イノベーターの周囲の様々な人材(カタリスト)が一層活躍して、イノベーターに必要な情報・資金・人材等の価値を届けることが重要ではないのでしょうか。こうした問題意識から、当分科会はカタリストがイノベーション・エコシステムにおいて行使するリーダーシップである「プロデューサーシップ」の概念化について取り組んできたところ、この度 NPO 法人 ZESDA と共著で上梓した「プロデューサーシップのすすめ」(紫洲書院)を引きながら、試論を提示致します。

○モデレータ 久野美和子氏 プロデュース研究分科会共同主査、電気通信大学客員教授
本田秀一氏 NPO 法人 ZESDA 事務局次長/プロデュース研究分科会共同主査代理

第二部では、第一部のプレゼンで出される(想定される)、いくつかの主要な問題提起・テーマ等をもとに、「プロデューサーが紡ぐネットワークの重要性と課題」という観点から、課題と対応に関するワークショップを行います。個のネットワークのたちあげ、運営、相互連携、情報共有事例をもとに、イノベーションにつながる重要性を明らかにし、これまでと今後の課題の共有を行いながら、立体的な議論を行います。また、会場からのご意見、御提案もいただきながら、改めて、「プロデューサーシップ」機能の分析・解析を行い、「総合知化」を試みます。

(テーマの事例)

- a. コロナ禍、気候変動、DXの加速等、激変の時代
こうした中で、我々は、どのような未来社会を望むのか。
Society5.0(AI と人類の英知を結合した未来社会、仕事の未来をどのように構築するか。
また、未来社会創造をマネジメントするプロデューサー(カタリスト)の特質・特徴、
その人材の必要性・重要性、育成について。
- b. プロデューサーとしての役割(現場からの具体的取り組みを通じて、課題と対応をあきらかにする。)
「戦略的産学連携」、「イノベーター育成へのチャレンジと再チャレンジ出来る文化・風土の醸成」、
「地域創生とイノベーション人材育成」、「イノベーションを生むコミュニティ・場の形成」面から。
- c. 未来社会創造に向けて、「プロデューサーシップ」を巡る課題と対応(まとめ・総合知化)

<申し込み>

年次大会に参加登録した人は、個別の企画セッションに参加登録しなくても、Zoom 情報が送られて、企画セッションに参加できるようになりますが、
当企画セッションでも別途「こくちーず」サイトをご用意いたしますので、そちらからの申し込みも可能です。